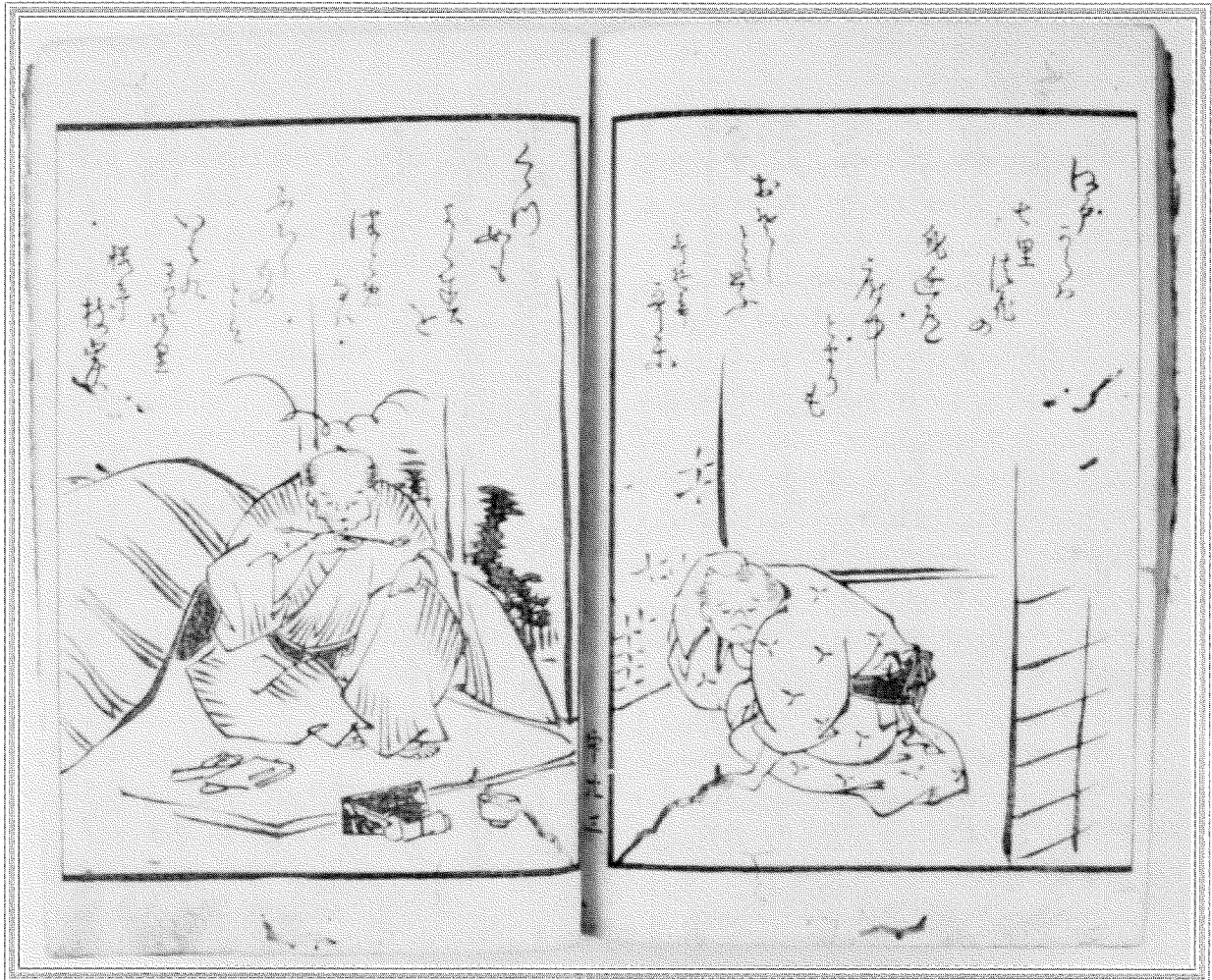


# あるむぜお53

府中市郷土の森だより

a | museo NO. 53

2000年9月20日



- 2 府中宿再訪 Part2 府中宿を往く人ー左二兵衛・福七の場合ー
- 3 展示会への招待 ミニ展16 府中ゆかりの文化財～中世の金工品
- 4-5 ノート 野外調査の原点・・・それは自然観察
- 6 最近の発掘調査 1万5千年前のキッチン
- 7 収蔵資料の紹介 神々の戦争ー太平洋戦争期の「お守り」群
- 8 ナチュラルセブン 第2話 怪しい森林

表紙写真 『身延詣道中滑稽 華鹿毛』 府中の挿画

“女郎屋”で出会った角力取に平あやまりの福七。福七にはまったくツいていない一夜でした。



『華鹿毛』には十返舎一九が序を寄せていますが、東海木曾の両道に異なり往来も少なく、身延詣・富士参の外、旅客を見ない、と書いています。

パタンとやっている内に、行灯をひっくり返す大騒ぎ。けれども左二兵衛・福七「角力好きはあんなものだろう」と、この成行きにはめっぽう寛容で、自分らも見たいと宿の下女に問えば、「この間江戸から来て、此上の天神様のもりでとります、とんだ繁昌でございます」とのこと。(はて、六所明神様ではなく、その南東の天神社ですね。)

さてその後の二人、まだ府中の町は一歩も歩いていないはずなのに「ここはだいいい所だね、女郎屋もあるらしい」と、そんな方には目ざとくて宿の女に案内させます。女の言うには「あづまや、柏屋、小倉やの三軒」で、二人はあづまやへ出かけます。

府中宿では公許の“遊女屋”はなく、それに代る“飯盛旅籠”がありました。東屋は実在で、府中宿で最初の飯盛旅籠として安永6年(1777)営業開始しました。柏屋も名前は実在ですが、飯盛旅籠の記録はありません。小倉やは記録はありませんが、消長の激しい商売なので一時期存在した可能性もあります。

そこでもとやかにあって、出会った角力取に投げられそうになったりしている内に朝になり、夕べの宿に取って返すと、そこそこに旅立って行きました。えっ!、この二人六所宮にも寄らずに行ってしまったよ。

いくらなんでももう少し何か見て行ったらいいのに……。でも、庶民の旅での府中宿に対する期待はこの辺にあったのかも知れません。

府中宿を往く人——左二兵衛・福七の場合

お殿様から庶民まで、甲州街道府中宿を通る人も様々でした。とは言え、街道を往来する庶民が増えてくるのは江戸時代もだいぶ下がった中期以降のこと。

庶民の旅を面白おかしく描写して大人気を博したのは十返舎一九の『東海道中膝栗毛』。この本の垂流は数あれど、甲州街道版のひとつが河間亭主人著の『身延詣道中滑稽 華鹿毛』(1809 文化6年序)。一九先生が栗毛ならこちらは鹿毛ときました。主人公も弥次郎兵衛・喜多八ならめ左二兵衛・福七の二人連れ。左二兵衛は弥次郎兵衛と同じ長屋住まい、福七は酒と女が飯より好きで、喜多八と同じ役者商売とか。弥次・喜多がお伊勢参りで、左二・福は身延詣です。

さてこの二人、弥次・喜多の旅を羨んで江戸神田を出たのはよいけれど、内藤新宿で早、四ツの鐘を聞く有様。(今の時計で朝10時頃と思し召せ。)これじゃあ府中までもたどり着けないと、狛達、高井戸、布田五宿と先を急いだはずなのに、やはり府中に着いたのは日も暮れようとする雀色時。

ちょっと渋皮のおけたお姉さんに「お泊りでございますか」と声をかけられると、すぐさまそこに宿を決め、連れは15人で後から来るなどと口から出まかせ、先客を追い出してちゃっかり奥の間に通されます。

してやったり、と思ったのは東の間、宿の亭主には怪しまれる、先客には文句を付けられる、で結局次の間のきたない座敷に移される次第。

ところでこの先客も、八兵衛と権七というまたまた似たような二人連れ。今日の昼間は角力見物をした様子。「角力は飯より好きだ」だの「あしたも一日見て行こう」だのと聞こえてきます。あげくの果てに取組を再現してドン



左二兵衛と福七の2人連れ

馬場治子

今日、府中市には5件の国指定文化財、15件の都指定文化財、37件の市指定文化財があります。このなかには馬場大門ケヤキ並木をはじめとする天然記念物や分倍河原古戦場といった旧跡、双盤念仏といった無形民俗文化財を含みますが、多くが有形文化財でといてよいでしょう。

今回は、こうした指定文化財のなかから、特に金工品を取上げ紹介しようと思います。

出品を予定しているのは、本町・妙光院所蔵の蓮華形磬、是政3丁目西部自治会所蔵の鹿島神社懸仏、河内武氏所蔵の鰐口の3点と、これに加えてもと片町・高安寺に奉納されたとされる応永22年の鰐口の拓本です。

いずれも中世の仏教工芸品で、武蔵府中を中心とした地域史はもとより、宗教史、産業史、美術工芸史などの分野においても貴重な資料です。

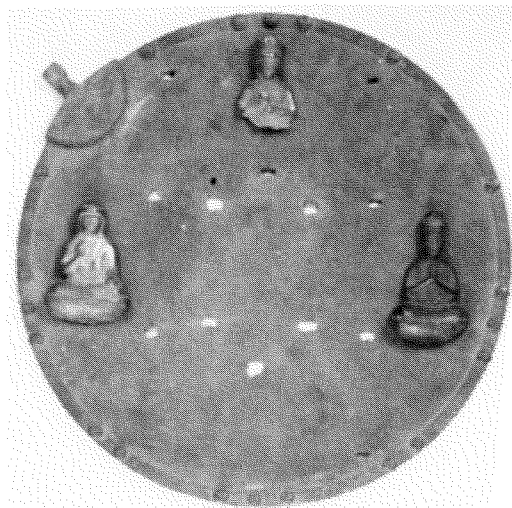
今ミニ展ではちょっと斬新な試みもします。磬と鰐口は、梵音具と呼ばれる楽器の一種。しかし、博物館や美術館の展示では、どんな音色を奏でるのかは想像するしかありません。その音色を、今回は聴いてみようと思います。いざ、中世の音の世界へ。



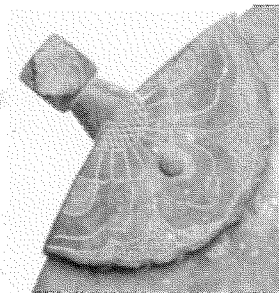
天正8年(1580)の鰐口  
市指定文化財。鰐口とは、神社仏閣の軒先に下げて布縄で打ち鳴らす楽器の一種。この鰐口は、かつて若松町にあった幸福寺観音堂に奉納されたもの。

## 展示会への招待—ミニ展16 府中ゆかりの文化財—中世の金工品

10/22 (SUN)  
〜  
12/17 (SUN)



鹿島神社の懸仏  
市指定文化財。懸仏とは、鏡面に仏や神などの像を表し、堂社内に懸けて信仰の対象としたもの。この懸仏は江戸時代に境内から掘り出されたもので、もとの姿は失われていますが、弘安7年(1284)の銘があって、制作年代が明らかな資料です。左上に残る吊金具に細やかな細工が施されています。



蓮華形磬  
都指定文化財。磬とは、法会の際に儀式を行う僧侶の右手前にぶら下げて、読経の間に打ち鳴らす楽器の一種。この磬は、開花した蓮とその蕾をモチーフとした特殊な形状とデザインを持つ点で注目されるものです。銘文がないため制作年代などははっきりしませんが、その作柄から南北朝期の製品と考えられています。

## ナチュラルセブン番外編



自然観察の花形、バードウォッチング

多摩川河原にて

前号の「あるむぜお52」より、「ナチュラルセブン」なる連載を始めました。過去10年以上に及ぶ、自然観察会で起こった様々な出来事から7つのエピソードを選出し、面白おかしく脚色を加えながら自然観を紹介しているものです。自然を観察する…ただ何気なく眺めるのではなく、読んで字の如く、観て察するという意味です。自然調査の原点はこの観察するという行為からすべてが始まっています。「ナチュラルセブン」は、読み物として楽しんでもらえるよう、ストーリー仕立てにアレンジされていますが、その内容は、あくまで自然観察で得ることのできた教訓を主眼に置いています。今回お話しするのは、自然観察を出発点とした自然調査の紹介です。観察するということが、いかに重要なファクターであるのかを認識するとともに、自然観察の意義についても考えてみたいと思います。すべては事実、脚色などひとつもありません…

## 出発点としての自然観察

漠然と自然を眺める…ああ、何てきれいな花だろう、ずいぶん不思議な格好の虫じゃないか、それにしても大きな鳥だなあ、そんな思いを1度は心に抱いた記憶があるでしょう。あまり関心がなければ、普通はそれで終わってしまうことも、多少の興味が湧いてくると見方も変わってきます。まずはその生き物の名前を知りたいという欲求を覚え、次に何故この花はここに咲いているのか、どうしてこの虫はこんな姿をしているのか、一体この鳥はどこからやって来るのか…そんな風に様々な疑問が生じてきます。こうなれば探求心は一

気に盛り上がり、もっとよく見てみよう、毎日欠かさず見てみよう、時間ごとの変化を確かめよう、などと展開するのではないのでしょうか。さらに、こうした行為の積み重ねはデータという産物を生みだし、気付いた時にはもうすでに立派な自然調査が成立しているというわけです。

今年6月11日発行の朝日新聞に非常に興味深いコラムが載っていました。送電線に止まるカラスの観察記です。多摩動物園で飼育係を勤めてきた土屋さん(現在は上野動物園勤務)は、夕暮れ時になると動物園の西側にある送電線に、決まって列を成すカラスの姿に疑問を覚えたといいます。…もしかしたら、電線の上がねぐ

送電線のカラスって何者？  
夕暮れに並ぶ群れを観察

上野動物園の土屋さん

深行 風見

カラスの群れは、いたるところに  
見られる。しかし、夕暮れ時  
には、送電線に並ぶ群れが  
目立つ。これは、カラスが  
送電線に止まる習性がある  
からだ。カラスは、送電線  
に止まることで、周囲の  
環境を観察している。また、  
送電線は、カラスにとって  
安全な場所である。カラス  
は、送電線に止まることで、  
周囲の環境を観察している。  
また、送電線は、カラスに  
とって安全な場所である。

仮説1 縄張り争いの敗者

仮説2 暑がり夏は林へ

送電線に止まるカラスの姿  
1985年7月11日朝日新聞

日	カラスの姿の数
7月1日	1
7月2日	2
7月3日	3
7月4日	4
7月5日	5
7月6日	6
7月7日	7
7月8日	8
7月9日	9
7月10日	10
7月11日	11
7月12日	12

らなのかも知れない。そう思ってからは、毎月1回ゾウ舎の屋根にのぼり観察を始めたそうです。以下は記事の抜粋です。

「観察してすぐ、ある習性に気がついた。送電線の下には雑木林が広がっていて、カラスたちは夕暮れが近づくと、まずその雑木林に一羽二羽と集まる。その後一斉に飛び出し、一部のカラスだけが電線に止まるのだ。実はカラスたちのねぐらは林の中で、縄張り争いに敗れたカラスだけが追い出され、電線に止まるのではないだろうか…。さらに観察を続けると電線に残ったカラスのその後の行動が、季節によって変わることがわかった。」

土屋さんは1年を通じて観察を続け、電線に止まるカラスの数をグラフで比較する段階にまで到達しています。何気なく見ているだけでは気付かないことも、土屋さんのように一度疑問を抱くことで、探求心が観察という行動を起こさせ、結果として何らかのデータを導き出した時、それはまぎれもなく自然調査と呼べるものになっているのです。さしずめこの場合、継続拡大すれば「動物園周辺のカラスの習性に見る環境構造」といったテーマになり得ましようか。

地球上には陸・海・空を問わずすべての場所について、多様な生態系が成り立っています。自然調査とは、言うなればこれら生態系の構造と機能を解明していくことに他ならないのですが、観察する目がないことには何も始まらないのです。

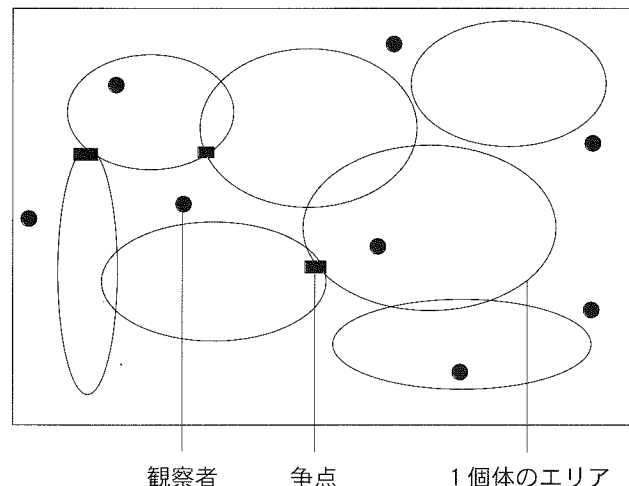
### 自然調査の方法あれこれ

まずは見て感性を養い、植物・昆虫・野鳥どれをとっても、観察して認識できるような訓練が重要になります。実際フィールドに出ても、そこで観察できる生物の種類や生態的行動が判断できないことには、調査の域に踏み込めないわけです。

たとえば、植物群落の調査方法に「サンプリング測定」というものがありますが、これはある植物群落内において、ランダムに1m方形枠をいくつか取り、そのマスの中に生えている植物を記録していくものです。これにより方形枠内において、それぞれの植物種がどのくらいの面積を占めるのか(被度)、植物各種の個体数(密度)、各方形枠に対して、特定の種がどのくらいの割合で出現するのか(頻度)などを導き出すことができます。ただし、出現する植物の判別なくして成立しないことは言うまでもありません。

野鳥の調査で比較的多く用いられる方法は、「線センサス」と呼ばれるものです。ひとつの道に沿って歩きながら、左右それぞれ25m位の範囲を後方に向かって進む個体をカウントしていきます。また、特定の調査地において種類と個体数を調べる方法には、草原・湖沼などで人が周囲から一気に追い出しをかけ、飛び去る鳥を瞬時に識別しカウントする「追い出し法」、さらに

### テリトリーマッピング



は繁殖期の雄の行動を利用して、縄張り数を見出す「テリトリーマッピング法」もあります。これは森林の区画内で、繁殖期のみ1種に限り調査を行います。巣を中心に円を描いて飛行する鳥が、別のエリアから飛んで来る同種の鳥と交わる数多くの接点で争いを起こします。このポイントからテリトリーを推測するため、先の「追い出し法」同様、相当の人数を要しますが、複雑な森林構造の中を飛行する鳥を目で追ったり、種類と数を一瞬にして見極めるといふ、非常に高度な観察眼が個々に要求されるのです。

### 自然観察に期待すること

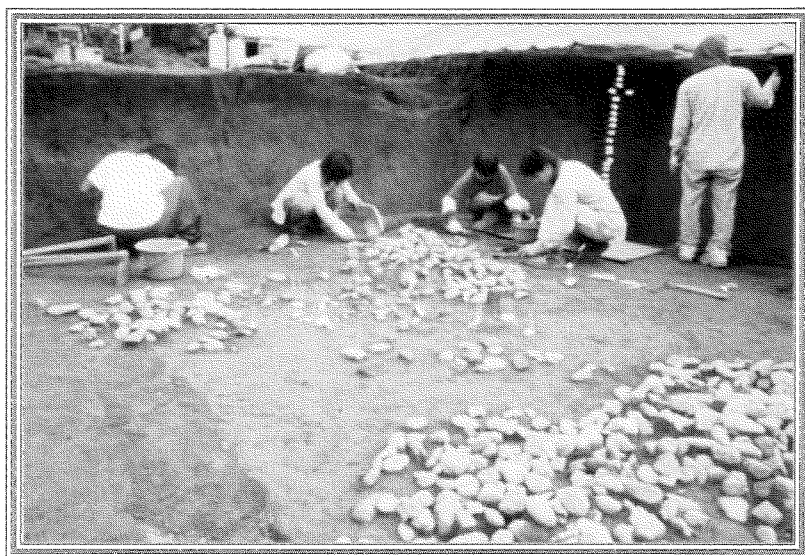
上記の調査方法は、目的に応じたいくつかを代表して紹介したのですが、本来調査の基本とは、「いた、いない」の確認作業です。「ナチュラルセブン」に登場する府中市自然調査団が1970年から15年間に渡り報告した調査の大半がこれに相当します。このフロラ(植物相)、ファウナ(動物相)という生物相の調査結果をベースに、そこから各テーマ別の課題が展開していくのです。従って何度も繰り返すようですが、やはり地道な観察体験が不可欠でしょう。

博物館では観察の楽しさ、重要性を理解してもらうためのお手伝いを続けています。展示や文献では、本当に自然を理解するに至りません。自身の五感をフルに稼働させて、体で感じ取ることが一番なのです。自然の鼓動をキャッチする能力が備われば、究極ですが、果ては自然そのものの意志さえとも通じ合えるようになるかもしれません。まずは、足元の自然からなのです。ナチュラルセブンの内容ほど劇的なものでないにせよ、観察で得られる自然観は、まさしく地球からのメッセージそのものなのです。

自然を少々間違った認識で捉えている人も少なくない昨今、始めは興味だけで結構です、どうぞ観察会に参加してみてください。自然と向き合わない限り、その本質は決して見えてこないのですから。



## 最近の発掘調査



調査中の礫群

# 1万5千年前のキッチン

白糸台3丁目 吉野隆司共同住宅地区から

府中市遺跡調査会 蔵持 大輔

本誌45号や49号では、縄文時代草創期の遺物・遺構を紹介しましたが、今回はそれらよりさらに古い旧石器時代の遺跡を紹介します。

京王線武蔵野台駅から北東へ約300メートルいった白糸台3丁目のマンション建設予定地から、旧石器時代に作られた大規模な「礫群」が発見されました。

礫群と聞いてピンとこない方も多いかと思いますが、今でいうバーベキューを行った跡と想像してみてください。しかし、バーベキューといっても、鉄板をひいて食べ物を焼いていたわけではありません。調理方法は今のところよくわかっていませんが、地面に拳大の礫を平面的に集め、熱した礫を鉄板代わりにして肉を焼いたり、食料を葉に包んで蒸し焼きにして食べるための施設と考えられています。

この礫群が発見された場所は、南東から北西の方向にみられる埋没谷の北岸側に位置し、現在の地表面から約1.6m下でみつかりました。この部分の土は関東ローム層という、いわゆる赤土です。

礫群は、南北約5m、東西約4mの範囲に4カ所ありました。それぞれが100～500個の礫からなり、その石材は砂岩やチャートが中心で、多摩川から調達されたようです。4つの礫群に囲まれた中心の空間には火を使用した痕跡である炭化物がありましたが、礫群の周囲には焼けた土はなく、熱を受けて赤くなって砕けたり、タールが付着した礫が少ないことから、礫を一時的にストックしておいた場所と考えることもできます。

礫群の周囲では石器作りの際生じる石屑なども出土していて、ここで石器の製作が行われていたことも推測できました。その石材を見ると、多摩川で採集できるチャートや貞岩ばかりでなく、遠くから運ばれて来た長野県和田峠産の黒曜石や相模川流域で採集できる緑色細粒凝灰岩と呼ばれる石材もあります。

これら礫群と石器の年代は、発見された地層や、この時期に特徴的なナイフ形石器をとまなうことから、旧石器時代の中でも最も人間の活動が活発になった後期で、およそ15,000年前と考えられます。

ところで、今回礫群を発見した地面は地下水の影響で変色していたことが幸いして、旧石器時代の遺跡としては珍しく、柱か杭と考えられる2つの穴と土坑状の穴1つを発見することができました。何に用いられた穴なのかはハッキリしませんが、日本ではこの時代の居住施設の痕跡はほとんど見つかっていないので、これがその痕跡ならば大きな発見なのですが……。ともかく、状況さえ恵まれれば、府中市から旧石器時代の住居跡が見つかる可能性もあるのです。将来の発見に期待しましょう。

### 府中市域の旧石器時代遺跡

府中市で発見されている旧石器時代の遺跡には、武蔵台遺跡や天神町遺跡、近年発見された朝日町遺跡などがありますが、それは武蔵野段丘面や浅間山の周辺などにあります。ところが、今回紹介した遺跡は立川段丘の縁辺に位置します。これまで立川段丘の縁辺では、狩猟用石器が点々と見つかっていましたが、旧石器人がそこで暮らしていた証拠は見つかっていませんでした。今回の調査成果は、こうした従来の常識を覆す発見でもあったのです。おそらく、立川段丘縁辺のほかの地点にも旧石器人の生活痕跡は、まだまだ眠っているのでしょう。

# 神々の戦争— 太平洋戦争期の 「お守り」群

小野 一之



寅治様、その後お元気でありますか。

あなたは、八王子で空襲に遭い府中に越していらしたと、前にお話を伺いました。終戦後は、娘婿に入られた義父とともに、府中の浅間山の麓で、開墾に精を出され、畑を拓くとサツマイモやナスやキュウリ、麦に陸稻、ハブ茶など、なんでも作られたそうです。その苦闘の思い出の鍬や鋸、お義父さまの出征時の遺品、大切にされてきたこうした品々を、博物館にと申し出てくださいました。

お宅に参上し、いろいろ見せていただいたり、伺ったりする間の、最後のほうで出されたのが、このひとかたまりの「お守り」でした。私は、たいへん驚きました。聞けば、義父庫吉様が中国大陸出征時に持参された守札の由。戦地を潜り抜け、「効

き目」が証明された「お守り」だったわけです。

その数、六一。ご出身地の八王子由木村神明神社の「砲弾除霊符」、同じ神社のもう一つの守り札には「奉専祈天神地祇諸仏菩薩 出動將武運長久身体健全」と厳めしく書かれています。都内では、高尾山・大国魂神社・御岳神社・大岳神社・高幡不動・小野神社・靖国神社・明治神宮、近県では鶴岡八幡宮・建長寺半僧坊・江島神社・寒川神社(神奈川)、香取神宮(千葉)、鹿島神宮(茨城)、身延山(山梨)、諏訪大社(長野)、富士浅間神社(静岡)などの守札があり、その多くには「武運長久」

の文字があります。成田山(千葉)・大雄山(神奈川)などは「身代わり」の守札、清正神社(港区)・湊川神社(兵庫)など時代を異わせる神社のものもあります。遠方では、伊勢神宮はもちろん、金刀比羅宮(香川)・宇佐神宮(大分)の守札まで含まれていたのです。

しかも、それぞれには、手に入れた先のメモ、例えば「愛国婦人会」「下柚木青年団」とか、「オキタ様から頂きました」「コレ八家にアッタノデス」などと書かれているではありませんか。そのひとつに「ミエ子ガカツキマシタオマモリフタ」とあったので、この方はどなたですか、と尋いて、娘さん、つまりあなたの奥様だとわかったのです。

こうした「お守り」群から、どんなことがわかるでしょう。か。「聖戦」遂行の大義名分と「弾除け」祈願の家族らの切実な願い。その両方を曖昧にうまく混ぜた「武運長久」という表現。全国のいたるところの神社やお寺で戦争用の守札が用意されていたという事実、これを手に入れる地域の人たちの「信仰圏」の問題などなど。

しかし、それよりも何よりも、無事帰還することができたこれらの守札の陰で、無数の膨大な量の「お守り」が、激戦地の野や山や海に散っていったらどうのことを思わずにいられません。けっして風化させてはいけない記憶の証人として、これらの守札を、博物館では確かに、永久にお預かりいたしました。

敗戦から五五年、今年の夏もすぐ暑かったですね。

# ナチュラル セブン

## 第2話 「怪しい森林」

中村 武史

市内東北部に奇妙な雑木林がある。何が奇妙って？その雑木林の土台は、都市にぽっかりと鎮座する、標高80メートル程の小山なのだから。都市の中に山？そう、これが浅間山である。その昔、古相模川が運んだ堆積物が、多摩川水系の浸食により削り取られた結果、残され坊主となった残丘なのだ。ここは自然観察のフィールドとして度々利用され、特に植物観察で絶好の材料が5月に出現する。浅間山の観察会で起きた、その植物にまつわる怪しい事件を紹介することにしよう。すべては、事実に基づいた創造の世界…

「府中で、特徴ある生物を紹介しようと思っても大変難しいのだが、幸いにも浅間山のムサシノキスグがあるからな…」イイズミ団長が苦笑い混じりに、次回観察会の内容を暗に求めてきた。ムサシノキスグの観察はリクエストも多く、まさに渡りに船の発言に即決定の運びとなった。ムサシノキスグは、1953年に檜山庫三氏によって命名され、氏の著書「武蔵野植物記」によれば、ニッコウキスグが低地の乾所に降りた型で、ユリ科の多年草、丘陵地の主として林下、時には草地にも生じ、芳香がある、5月上旬～下旬に開花、とある。つまりは高山植物の変種が街中の小山に自生しているわけだ。毎年5月には植物愛好家が行列を成し、まるでアイドルを取り囲むかのごとくシャッター音を響かせている。

その日のイイズミ団長は極度の上機嫌。それもそのはず、人気抜群のムサシノキスグを目前に専門家の解説付きという特典が、おそらく通常の約3倍と思われる参加者を集め、団長を渦のように取り巻いていたのだから。…団長を先頭に動き出した一行は、3つの頂に別れている浅間山の北側に位置する堂山を目指した。頂上へ向かう直線コースを避け、山を巻きながら進む道の途中に、ムサシノキスグはその姿を現す。

だがしかし、ご満悦のイイズミ団長、実は出発時から妙な違和感にかられていた。長年の直感というやつであろうか、一行の最後尾に見え隠れする怪しい人影を察知していたのである。明らかに参加者とは異なる者が団体に混じっている！一行はなだらかな巻き道をカーブしな

がら、目的のポイントに到着した。…ひととりの講釈が終了し、各々が花の写真を撮っている時間、イイズミ団長は例の影を追っていた。いるいる、なるほど怪し気な男だ。向こうもこちらの様子を伺っている風だ。さて、何の目的で？…団長に、ハッと閃きの表情が走った。ある推測的結論に至った満足感のためか、その後には薄笑いさえ浮かんでいた。

「さあ、頂上目指して急ぎましょう！」唐突な大声に驚いた参加者達には少々の戸惑いもあったが、歩き始めた団長の勢いにつられて全員が動き始めた。…ところが、どうしたことが団長は登り道を選ばず、また同じ巻き道を進み始める。もう1周しようというのか？いや確かに頂上へ向かうと言ったはずだ、では一体？何が何だかわからないまま再びムサシノキスグの群落に戻り着いた。…「おい！そこで何をやっているんだ！」初めて聞く団長の怒声。その声は怪人物を一瞬直立不動にさせるほど、迫力満点の響きであった。しかしそれも束の間、ムサシノキスグの入ったビニール袋をした男は、疾風のごとく駆け出したのである。「待て、コラー！」事の重大さをようやく理解した参加者一行は、団長が追い始めるよりわずかに

早く一斉にダッシュを試みた。これがいけなかった。何せ通常人数の3倍である。細い山道に人のかたまりがはみ出さんばかりに走り出したのだ。互いの腕や足はぶつかりあい、しまいには転倒者も出る始末で、男との距離は開くばかり…やがて賊は森の彼方に姿を消してしまった。

…「大丈夫ですが、皆さん。こんなことでケガしてもはじまりませんよ。」団長は全員の安全を確認すると、ゆっくりと話し始めた。「大切に守ろうとすればする程、キスグは盗まれてしまう…悲しいかなこれが現実ですよ。あの男も植物を愛しているのかも知れないが、「自然」を理解しているとは決して思えない行為ですね。ああ、自然を大切にとアピールすることが、逆に貴重な種の在処を心無い人にも教えてしまうことになるのは悔しいなあ〜。」最終的には、団長の嘆き節が雑木林にこたえました。



浅間山のムサシノキスグ

※ あるむせお イタリア語で‘博物館で’‘博物館にて’の意